武蔵野日曜集会
神の選び
――ロマ書第９章１～３節――

１９９６年７月７日
小池辰雄

詩『アッシジのフランチェスコ』選びの器　アナテマ魂

【ロマ９・１～３】

１我キリストに在りて真をいい虚偽を言わず、２我に大なる憂あることと心に絶えざる痛あることとを我が良心も聖霊によりて証す。３もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。

●詩『アッシジのフランチェスコ』

私はここのところ伊豆高原の山小屋で暮らしていたわけですが、そこで私はある一つの本を読んだ。それは中世初期のイタリヤの傑物であるところの、アッシジのフランチェスコです。この人のことを読んで非常に感激しました。宗教改革者のマルティン・ルッターよりか先に宗教改革をした人です。一般の人はよく知らないでしょうが、私はこの人のことを読んで、詩を書きましたので、読ませていただきます。いずれ発表するつもりですけれども。（詩『アッシジのフランチェスコ』。『霊界の星々』298頁以降参照）

アッシジのフランチェスコ

（1182頃～1226年）

或る巡礼者、門を叩いて
「もしもし。産婦が産室を去り
厩の片隅に藁を布き
そこに臥すれば嬰児産まれん」
この不思議な勧告に従うて
そのようにしたら男の子が生れた。
イエスの秣槽のような産れ方
これは事実か伝説か、疑うなかれ
選びの器に伝説めいた事実あり。

時は一一八二年春のこと
処はイタリア中部スパジオ山麓のアッシジ
母の名はピカ
父はピエトロ・ディ・ベルナルドーネ
織物商で貴族に次ぐ職柄。
母はこの児をジョヴァンニと名づけたが
旅から帰った父はフランス好きで
フランチェスコと改名させた。
母は気品あり敬虔な魂の人
公文書にはドミニ即ち貴婦人呼ばわり、
フランチェスコの本質は母に通ずる。

当時のイタリア宗教界は低落腐敗。
さて青年フランチェスコは時代の潮に
棹さす舟の荒武者の如く
享楽の旗を掲げて遊蕩三昧
同類の無頼の徒の旗頭然として
金をばら撒く親分はだの侠客よ
不幸の徒を一瞥するや持てる金銭を
残らず与えてしまう奴
襤褸を纏う者あらば、惜し気なく
おのが美服を脱いでやり
そのぼろを自分が着るという
聖者のひらめきある男
一見放蕩ながらこの息子に
マドンナ・ピカは大度の美質を洞察。
わが子の行く末を期待して
「妾はあの子に希望をかけています
祈りの中で神の愛顧を聴きました」

当時は皇帝対教皇、公侯対王者
民衆対貴族の抗争の渦巻く時勢。
さればアッシジの邑も安泰でない。
独逸王室支配下にあったアッシジ市民は

終にその隷属解放の火蓋を切った。
それは平民と貴族の角逐とも言えるもの。
フランチェスコも従軍兵として戦い
城壁構築に際し梃の使用法を体得した。
戦乱は貴族の味方ペルージア軍の勝利
かくてアッシジ市民軍は捕虜となる。
フランチェスコもその一人。
一二〇三年、市民と貴族の平和協約が成り
市民は全員解放された。
俘囚から帰還した彼の生活は
従来の如く遊蕩饗応の態たらく。
こは天譴か、熱病に襲われる。
病床でおのが過去と現世の儚さ
死への怖れとコーヘレスの
「一切空」を感じ
自暴自棄的衝動に陥り
病後再び享楽の巷に身を投ぜんとした。
さわれ彼の魂に別の声が聞えた
「天的崇高なるものを求めよ」
と。かつてアウグスティヌスが
母モニカの祈りと
「トレ・レゲ」の天声に目醒めた如く
このフランチェスコも聖なるもののため
おのがすべてを献げんと決意した。
アッシジを立ち出でんとしたときに
彼はある憐れな貴族のみじめな相を瞥見
彼は直ちにおのが華美な服装をこれに与え
その貴族の貧しい武具を身につけた。
彼は欣然アプリアへの征討の
合唱団に加わる。
スパジオ山の麓の道を通って
スポレートに着くや
再び熱病に囚われ床に臥すや天来の声あり

再び熱病に囚われ床に臥すや天来の声あり
「フランチェスコよ
汝は何処へ行くや。
我は主の使なり。
汝は虚しき者に仕うべからず
汝は主の僕となるべき者ぞ！」
「主の僕に。然らば我は何をなすべきか」
「汝速かに故郷に還れ
其処にて啓示を受けよ」
み使の姿は消えた。この神秘な訪れに
彼のアプリアへの志は挫かれ
飛ぶが如く帰った。
彼は郊外の森や洞窟で黙想し祈った。
彼は終に旧き生活を断ち切るべく
宴席を催した。
一二〇五年夏の夜のことだった。
蝟集したあまたの友は徹夜の騒ぎ
稀代の友に称讃と感謝を浴びせかけた。
酒に酔い痴れて痴態を暴露し
友らは街上に踊り出て舞えや歌えや。
「赤きに躍る青春よ
酔えや歌えや春は今
春は花なれ花なる乙女
微笑む春の時は今
我らが春を歌え君」
「諸君見給え、オムブリアの蒼空を
おお、明星が光ってる、歌え歌え」
更けゆくアッシジの邑に歌声が鳴りひびく。
「酒宴の王者はどこに居る
おい！　フランチェスコ
馬鹿に消気じゃないか、
ハハァ、恋の捕虜になったのか……」
「そうだよ、気高い純潔な

乙女を貰おうと思ってる」
この告白の内実は友らには全然わからない。
彼はもう世の属ではないのだ
彼は彼を創造り給いし聖者に全托。
彼と友らの間には
超ゆべからざる溝ができた。
噫、フランチェスコは今や
新しき船出の解纜！
旧き我及び友らとの絆は断ち切られた。
光栄ある約束をもつ孤舟の船出と相成った。

アッシジの郊外ガルチェリ(Garceri)洞窟に
彼は瞑想と祈りに赴くのであった。
マタイ福音書十三章四十四の天国の宝に
因んで彼は相対界の儚き物を棄て
絶対界の無一物無尽蔵を追求した。
神との霊交に没入した。
天来の霊油が灑がれ
マリヤからの愛の火が点った。
「静けき祈りの時はいと楽し」の讃歌を
そのまま彼は味わっていた。
父なる神に祈入して神人合一の心境
地上の相対界のどん底の無私なる彼
聖意体現が彼の全念願
詩篇の祈りがそのままおのが祈りとなる。
新約のキリストの心が彼の心に沁み込む。
貧しき者、虐げられた者
侮られた者、ひとに棄てられた可哀相な人
悲しむ人、悩む人、そういう人々と
同じどん底に自分を置いて
助けることが本当の愛。
彼の胸はこの愛に燃えて
具体的な愛を体現、身証せんと
燃えてやまぬフランチェスコであった。

彼のは所謂信仰ではなく
正に神交、神との霊交が彼の現実だ。

時は熟した。彼はローマを訪ねる。
しかもそれは貧しさの極み
乞食の姿で乞食の群の一人となって
道往く人に恵みのパンを乞うのであった。
腹は減る、慈悲の銅貨で一片のパンを
托鉢僧も及ばぬ惨めさよ。
だが、どん底心の彼は神に欣然感謝。
「恵福なる哉、貧しき者」
とはこの身境なりとキリストにも感謝。
詩五一にある如く
神の受け給うは砕けた魂だ。
彼は富めるおのれに勝ち
神の僕を自覚した。
富者の神の国に入るよりは
らくだの「針の穴」という狭き門に入る方易しだ。
彼はかくて神と交り、十字架像を仰ぎ
罪びとの自覚のありがたさを知った。
彼は神一切に生き
おのれは乞食然たる無者たるの自覚に入る。
聖徒とは神の聖を讃美する無者だ。
ローマには宿無し、浮浪者、乞食が
群をなして都の一角にたむろしている。
どの国の都でも大方都の一角に
そういう巷があるとは不思議なことだ。
ともあれ、フランチェスコは無一物
襤褸衣の乞食となり路傍の大地を座敷とし、
昼は青空を、夜は星空を天井とする。
この在り方は原始的自然人
これを体感して何と都会生活に
無駄の多きかを悟った。
キリストの「恵福なる哉貧しき者

天国はその人の有なり」の真意が
そのまま体感されて聖名を讃えた。
なやめる者、悲しむ者
貧しき者こそ兄弟だ
自分の居場所はそういうどん底だ。
自分の花嫁は「聖貧」だ
キリストはそういう聖貧を貫いた。
だが彼はそういう貧者に徹するに
二年を要した。
中世紀には癩患者少なからず
キリストの聖なる愛は癩を癒した。
その御力にあづかる悲願は切実。

聖ラウンフホールと言う城主は
敬虔にして神と教会に奉仕した。
キリストが最後の晩餐に用いた盃
それは金盃で行方不明と言うので
彼は馬に乗って城を出た。
折しも城外にいた一人の癩患者が
彼を見るや手をあげ歎願して曰く
「ねがわくは聖名により憐み給え！」
「今は汝の如きを憐む遑なし」
彼は幾星霜諸地を遍歴したが
聖盃は竟に発見し能わず
徒しく還ってくると門前にはかの癩患者が
依然として坐し居り、彼を見るや
かの時と同じ言で歎願した。
彼は今は以前の彼ではない
馬から降りた、懐中には一片のパンのみ
これを与え、小川の清水を掬んで飲ませた。
その刹那
癩者は輝くキリストの相に変じた。
彼は驚いて跪いた。
キリストは語り給う

「見よ、盃は其処にあり
清水を掬みし柄杓なり。
さきに与えしそのパンは
裂かれしわが体なり。
その冷水は十字架上より
流れしわが血潮なり。
貧しき人と偕にする
食こそげにや聖餐なれ！」

ある日、馬に乗ってフランチェスコは郊外に出た。
すると路傍に臭気甚だしき癩患者。
これを一瞥するや
たまりかね馬首を別の道へ。
次の瞬間、権威あるみ声が
「フランチェスコよ！
汝はわが心を
心とするはづではなかったか」
彼は馬の手綱を停め、ひらりと飛び降りた。
彼は恭しく癩患者の手に熱く接吻して
「兄弟よ、赦しておくれ！」
彼の双眼から熱い涙が頬を伝った。
「私が悪かった
今日からお前は私の兄弟だ」
癩患者は呆気にとられ、不思議に思った。
フランチェスコは
財布を逆まにして全部与えた。
金銭を全部やったのは
おのれ自身を与えたことだ。
彼自身が乞食の貧しさとなったので
逆にキリストが彼の中に入って来た。
彼は貧者、弱者、病人の兄弟となる。
要するに社会の最低辺の人たちの兄弟だ。
かくて癩病院を訪ねて病者に接すれば
癩患者は何か知ら彼から力を受ける。

キリストは祈りの人
彼の三年の活動には
二十年の祈の静寂があった。
父なる神に深く祈入して
力を体受していた。
フランチェスコも
祈りの沈潜を何より貴んだ。
ひとに何と言はれようと
祈りは彼の生命。
サン・ダミアーノという
見棄てられた草庵に入る。
其処のキリストの聖像が彼に
「我に来よ」
と。彼はこの柔和な聖像と語った。
「おお、偉大なる栄光の主よ
御身の僕、此処にあり」
彼は合掌し、跪いて聖言に聴き入った。
「わが子よ、汝おのれを脱却すること
いよいよ繁ければ
益々わが内に入ることを得る。
世の空虚を斥ければ
我は汝の心に住む。
フランチェスコよ
汝おのれを棄て、一切を棄てて
汝我に来よ、我に従え。
我は道なり、真理なり、生命なり。
さらば往け、貧しきわが家をたてよ」
「主よ、僕は欣然御身の命に従います」
かくて聖像との神秘的交霊は
彼の全的回心となり
一粒の麦が地に落ちて
自我の殻が全く破れ、爾後この天的生命
この原種を通して

多くの実が結ぶことになる。
彼は草堂修築に際して
財布ごと堂守の牧師に献ず。
彼は言った
「どうぞこの金で油を買って
あの聖像の灯火を
不滅のものにして下さい」
フランチェスコは日々
サン・ダミアーノで暮した。
しかも彼はぼろを着
涙をながして歩いた。
彼の涙はキリストの涙
惨めな人々のための。

一二〇七年春弥生
「旦那様、大変でございます
若旦那フランチェスコさまが……」
「何っ、フランチェスコがどうしたのだ」
「まあ、乞食のようなお姿で……」
そこへ乱髪のフランチェスコがぼろを着て
腰には麻縄を帯び、托鉢僧の姿である。
これが光栄有る彼の凱旋と誰が知る。
父ベルナルドーネは憤怒、群衆は嘲笑。
父は阿修羅の如く彼の頸筋を掴んで
家の中へ引曳り込み、閉じこめた。
父は威嚇、虐待して翻意させんとした。
そんなことで翻る彼ではない。
今やキリストの愛敵
忍辱を衣ている彼だ。
「おお主よ！
何もわからぬ父を赦させ給え！」
父は折檻に疲れ、息子に絶望、旅に出た。
母ピカは優しく翻意を促したがこれもだめ。
母は負けた

「野の自由へ」と彼を見送った。
彼は合掌、父母のため言い知れぬ涙が光る。
彼の脚は再びサン・ダミアーノへと
恰も野に放たれた小鳥が巣へ還る如く。
父は旅から還り
家督相続権を奪い、廃嫡。
此処はサンタ・マリア・マッヂォーレ法廷だ。
フランチェスコが欣然として現われた。
アッシジの僧正が眩い法服で着座。
群衆が鳴りを静める。開廷となる。
フランチェスコが
一切を父に返還すべく命ぜられる。
彼は忽ち衣を脱ぎ、裸となる。
着物に金を添えて、監督の前に差し出す。
「皆様、今日からは
私は神にのみ仕える身
地上の父から受けた一切をお還しします。
以後私の呼ぶ父は天の父なる神です……」
父ピエトロ・ディ・ベルナルドーネは息子の
衣と金を奪うが如く掴んで法廷を去った。
フランチェスコの恭しく且つ厳然たる姿に
列席のすべての者が深い感動を覚えた。
彼がサン・ダミアーノに於ける
聖像との交霊は
フランチェスコの一生を画した重大な事態。
「どうぞこの金で油を買ってあの聖像の
灯火をいつも灯るようにして下さい」
との言は
キリストにおのが霊火で応えているのだ。
フランチェスコはいつもボロを衣
麻縄を帯び泪を浮べていた。
その時代の宗教的堕落に対する
キリストの涙だ。
母はフランチェスコのため

毎日食物をサン・ダミアーノへ送った。
彼はロマ書八・三五～三九の聖句さながら
キリストのあつき護りの中にあった。
おのれを棄て、ひとにも棄てられ
十字架を負った彼は
キリストに確と掴まれた。
「我に従え！」
主のみ言は実力に裏づけられている。
裸形、素足、無一物の彼に山賊が現われた。
彼は捉えられたが
無一物なので残雪の谷底へ放り込まれた。
彼はどんな目に遭っても
聖名を讃美している。
辛うじてベネディクト派の
修道院に辿りつく。
いかなる人をもキリストの化身と見て
合掌する彼だ
「敵を愛せよ」と言われても
彼には敵が居ないのだ。
いかなる虐遇も迫害も無効だ。
彼は相手を詛わない、ただ忍受
しかも莞爾として。
彼は一切の事態をただ愛を以て体受。
愛は最大の力、すべてに勝つ。
相手を大きく包む、アトラスの如く荷う。
修道院で働き、飢えをまぬがれた。
恵まれると彼は癩病院を訪ね
愛を以て力を与える。
しかも彼は乞食であり、托鉢である。
久しぶりでアッシジへ戻った
御堂修築のために。
彼は広場で聖歌を唱う。
群衆にダミアーノ修築を熱烈に語る
「アッシジの人々よ、我に石を与えよ」

彼は石を運んで、修築に取りかかる。
聖霊は彼に力を与え給う。
神のために働かん者は托鉢を恥じる勿れ
主キリストは無一物で
ひとを助け救い給うた。
力は神から来て、奇蹟が無数に起きた。

一二〇八年の春、彼二十七才にして
終にサン・ダミアーノ修築は完成した。
にも拘らず父ベルナルドーネは
息子の惨めな相を見て
呪詛と叱責の暴言を浴せた。
彼の熱誠にはアッシジの町民も
竟に心服した。
彼は多くの寺院を修復した。
ポルチンクーラの聖ペテロ会堂と
サンタ・マリア会堂の修復は
彼の深く感謝したもの、
勿論彼はその中で祈り瞑想に耽った。
フランチェスコには彌撒は魂の生活の中心
キリストの十字架の死を念ぜしめる故に。
荘重な聖楽が堂内に流れる
神秘な雰囲気の中で合掌
紫色の法衣の司祭の香炉の馨
合掌、祈念、女声合唱
「これわが肉なり、これわが血なり」
と唱える司祭
これを耳にしてキリストへの愛の殉道心
司祭のマタイ十章七～十三の朗読
これを聴いたフランチェスコは
わが往くべき道を決意
即ち殉道の旅路！　どん底の愛の路
そこに天国が築かれるのだ、霊感が全身に。
褐色の上衣を着、腰には縄帯を締めた

アッシジの広場で辻説法だ。
「路ゆく人々よ
主は皆さんに平安を賜う！」
全身の叫びに人々は深い感動を享けた。
フランチェスコの
棄身の生活そのものが救の徴。
彼に倣い、同じ生活に入る者が増えて来た。
十字架、復活のキリストが堂から街頭に！
宗教的革新が茲に始まった。
聴衆の中に富める青年ベルナードがいた
フランチェスコの生活を見た彼は
まことの「聖者の境涯を慕う心」が湧いた
福音的貧困、その如く生きんと。
「フランチェスコよ
あなたは今夜何処に宿るや」
「我は宿なし
大空がわが屋根、大地が寝床」
「ともあれ
今夜はわが家に泊まって下さい！」
ベルナードはその夜眠れず
出家の決意となる。
フランチェスコは
「わが神よ、わが主よ、わが凡てよ！」
とくりかえし心に唱えた。
その祈りが隠れた力となった。
ベルナードはおのが決意を打ちあけた。
フランチェスコはキリストの言
「往きて汝の所有を売りて
貧しき者に施せ
人もし我に従わんと欲わば
己れを棄て
おのが十字架を負いて我に従え……」
を読みあげて、これが我らの道だと言った。
ベルナードは即座に貧者を訪ね始め

おのが財を全部頒ち始めた。
フランチェスコはこれを見て
涙ながらに感激した。
有即無の無心こそ
頒ちて尽きぬ天心である。
キリストも使徒らも天来の力のほか
何をも求めなかった無者たちだ。
我もなく世もなく
ただ神キリストに祈入する
そこに宇宙的な妙心が与えられる。
フランチェスコは
この托鉢道の行者であった。
彼はポルチンクーラに幾人かを伴れてゆき
みすぼらしい小屋を編んで夜を明かした。
富めるエジディオはフランチェスコを慕い
彼に自分も貴殿の団員の一人にと願った。
「慈しい兄弟よ！
神は貴方を選び給うた。
あなたは皇帝の騎士たるべき人なるに
神の騎士、下僕となり
聖なる福音の行者とされたのだ」

初代のフランチェスカンは清貧を
魂の呼吸とする神の歌人、愛の大道芸人。
しかも彼らは百姓をみれば共に働き
病院を見れば患者の友となり
愛の祈りを捧げた
人助けが彼らの悲願であり法悦だ。
わが国の宿なし聖人親鸞もこれに類した。
まこと宗教は寺院になく
人助けの生活にある。
活ける寺院、歩く寺院となることだ。
まことの恵福は人助けに臨む神の慰楽だ。
金もなく、住居もなく

衣服もない裸一貫の
どん底で人のため尽くすところに
神の力と恵みが臨むのだ。

「わが主よ、わが思いに非ず
み旨のままになさしめ給え」
山に籠って隠者となるか
巷に降りて塵寰の人たらんか彼は祈った
そして山を蹴って雑踏に降り
人間苦の中で神の聖姿に接した。
悩む人々に奉仕して神の愛を体得した
現実苦の中でキリストの愛を撒いた
すべてを抱き荷う菩薩行。
罪人、苦悩の人、淫婦等の間に身を置き
キリストの愛を体得した。
また他面、彼は寂しき処を探って
深く神に祈入して魂の平安と力を得た
それはキリストに倣う在り方であった。
彼は巷間で声高らかに説法した
その内容の自由さは、人間各自の
自由をおのずから悟らしめた。
各人は神の前に平等
懺悔と告白と執り成しの信者たれ。
彼によりヒヤラルヒー（教階制度）は
本質的に否定されていた。
彼は正に宗教改革前の改革実践者だ
正に使徒らの継承者だ。
市民の間に憎悪、嫉妬、嫌悪が消えた
平安、和合、謙譲の相が現われ
感謝、頌讃の歌声、街に流れる。
聖霊の愛が霊風となって来た。
その源泉的人物こそ
フランチェスコであった。

フランチェスコを慕うた女性に
ローマの貴婦人ヤコバがあった。
彼は彼女を恰(あたか)も母の如く敬愛した
霊的な心魂の愛には天的な花が咲く。
そしてまたフランチェスコとクララの
師弟愛は心魂の抱擁(ほうよう)であり接吻(せっぷん)であった。
そこにはパラダイスの花が咲いていた。
クララはおのが草庵(そうあん)に彼を招き
幾人かの友らと彼の説法を聴いた。
法王グレゴリオが後に寺院での
フランチェスカン（女性）の説教を
禁止せんとしたとき
クララは毅然(きぜん)として法王に抗議した。
フランチェスコとクララの師弟愛は
不滅の美で、彼の亡きあと
クララの魂にフランチェスコが内住し
クララは優しき女性ながら
魂は不屈であった。

ある日、彼は二人の弟子を伴(つ)れて旅した。
彼らが歩いていると俄(にわか)に無数の小鳥が
彼の前に降りて来たので、彼は言った
「わが姉妹なる小鳥たちよ！　……
神さまはお前たちに
何処(どこ)へでも行けるように
自由自在な翼をくださった……
神さまの御恩を忘れないように
讃美(さんび)しなさい」
フランチェスコの言葉がわかったように
小鳥たちは一斉(いっせい)に嘴(くちばし)をひらき羽を打ち
頸(くび)を伸ばして恭(うやうや)しく地に垂(た)れた。
彼が祝福すると
小鳥たちは囀(さえず)りながら舞い去った。
彼がアルビアーノという町に来て

説教をしていた。
すると空に無数の燕が来て囀りだした。
彼は手を振って
「わが姉妹なる燕どもよ！
暫らく黙しておくれ
静かに神様の話を聴くが好い」
燕たちは直ぐ声を潜めて、聴くのであった。
フランチェスコには鳥も草も花も
みな友だちだ。
彼の霊感霊力は愛の言となって
いかなるものにも通ずるのであった。
彼はすべてのものに神讃美を促す。
わけても悩む人、苦しむ人、棄てられた人
貧しき人、虐げられた者、病める人
特に癩病人、凡そ不運な人たち
更には、盗賊、追剥の類いまで
彼らを不憫に想い、包み抱く
どん底の愛を以て接するので
彼らはその不思議な愛に力を得たり
心が砕かれたり。

フランチェスコは眼疾になやまされた。
ある日、クララとの歓談のあとで
忽然と詩泉が湧き溢れ
かの有名な「太陽の讃歌」を詠った。
その抜粋を左に記そう。

「いと崇だかき全能の善なる主よ！
……
讃美せよ、わが主を
被造物凡ての故に
とりわけ兄弟太陽の君のゆえに
彼はすべてを照らし
地の子らに光あらしむ

……
わが主を讃めよ
姉妹なる月と、星々の故に。
主は頌えられん、兄弟風のゆえに。
空気と雲と、霽れた蒼穹と
そして季節の故に、わが主を讃美せよ。
主を讃め頌えよ、水なる姉妹のゆえに。
……
わが主を讃美せよ、兄弟火のゆえに。
主を讃美せよ
姉妹われらの母なる地のゆえに。
……
主を讃美せよ、我らの姉妹肉体の故に。
恵福なる哉
いとも崇だかき聖旨を悟る者は
そは、第二の死彼を冒さざればなり。
……」
この讃歌は爾後
伝道の序曲として合唱された。
彼の影の存在クララはいかなる時にも
彼の隠れた愛の力であったことは
後のベアトリーチェの
ダンテに於けるが如くであった。

フランチェスコは病に罹った、険悪だ。
弟子どもは彼を故里のポルチンクーラへと。
展望のきく地点で
フランチェスコは駕籠を留め
「私の顔をアッシジの方へ向けてくれ」
彼は、両手をあげ十字を切って
「主よ！　アッシジの人々を
祝福して下さい」
嘗てローマの貴婦人
ヂャコーミア・ディ・セッティゾーリが

彼に帰依したが、恩師の危篤を聞き
急ぎ馳せつけた。
マグダレーナがキリストの臨終に
蝋燭や香料をもたらした如くした
彼女は涙ながら彼の枕許に平伏した。
彼は彼女の来訪を悦んだ。
十月一日、彼は死期の迫りを感知し
兄弟たちにおのが身を大地に置かしめた。
彼は裸形となって大地に跪いた
これは淑女「聖貧」に抱かれんため。
二十余年「聖貧」と一つになって
今日を迎えた
今や彼女に抱かれて
父のみもとに還らんとする。
「我は為すべきを果せり」
と並み居る弟子らに言い
彼らを祝福して横臥した。
彼の願の如く彼らは「太陽讃歌」を歌った。
彼も微かな声で唱和した。歌い終ると
詩篇百四十二篇を口吟んだ。
「レオよ、灰をわしの体に撒いておくれ
間もなくわしの体は灰と塵になる……
おお、神さまの恵み
聖霊の交わり、キリストの愛
遺れるこれらの子らの上に、アーメン
私は召される……おお、天のみ使が……」
雲雀の一群が飛来した
彼の霊を迎えに来て囀っていた。
時に一二二六年十月三日、秋の夕暮。
かくて四十五年の地上の生涯を
神愛に生きたアッシジの聖者は
聖国へ召された。
爾来、彼の霊は彼を慕う
無数の人々と共に生きている。

●選びの器

ローマ書9章に入ります。

1我キリストに在りて真(まこと)をいい虚偽(いつわり)を言わず、2我に大なる憂(うれい)あることと心に絶えざる痛(いたみ)あることとを我が良心も聖霊によりて証す。3もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛(のろ)われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。

この節は非常に素晴らしい言葉です。

「兄弟が救われるためには、自分はキリストに呪われて、捨てられてもいいんだ」と。「詛(のろ)う」というのはギリシア語で「アナテマ」という。呪われ、魂を「アナテマ魂」という。このアナテマ魂のパウロはさすがです。信仰の幅、深さ、弾力性のあること、これはパウロが一番です。パウロ書翰はよく読むといい。ヨハネがなくても、パウロがないと、新約聖書は力がなくなってしまう。やはり、始めはキリストに逆らっていたサウロがひっくり返ると、自然に信じた人よりももっと凄い現実になる。パウロは選びの器であるし、フランチェスコも正に選びの器です。選ばれるということは、その人を使って本当の天来の福音を人々に伝えるために選ばれるのであって、その人がいいの悪いのというのではない。誰でもが選ばれる。神さまの御用にたつためには、その人の良し悪し、知識があるない、そんなことは問題でない。ペテロが自分のことを

「無学の凡人(ただびと)」

と言ったでしょ。どれだけ聖書を読んだとか、そんなことではない。あなた方一人一人はみな選びの器ですから。その選びは非常な責任と光栄がある。だから、天国に、地上を去って次の世界に往くときに、男でも女でも老いたるも若きも、そういった意味の棄身の伝道をしたかしないかで、天国往きにすぐになるか、「ちょっと待て」と言われるか、決まるんです。ミルトンがあるところでそういうことを書いている。自分は天国に行けると思ったが、天の使いが、

「ちょっと待て！」

と言われる。「ちょっと待て」と言われるようではだめなんだ。私が育った無教会では、「信仰、信仰」と言って、しょっちゅう信仰が問題とされた。

「行為ではない、信仰が大事だ」

と。信仰がサムシング（何ものか）になったら、またこれはだめなんです。

「私は信仰も何もありません。ただ圧倒さているだけです。キリストの愛の力に圧倒されているだけで、私は自分の信仰なんて、そんなものは何もありません」

と。これが本当の答です。

「信仰がどうだこうだ、行為がどうだこうだ」

と、そんなことを考えているような、そんな相対的な世界ではない。正に「無者」なんです。

何も無い。人にどう言われようと、どう評価されようと、そんなことは問題ではない。

「ただ私はキリストに圧倒されて、キリストの御力が現れているだけの話です」

というのが、本当の僕なんだ。そうでないと本当の力がこない。自分を何かと思ったり、自分を省みたりしていたのでは。そんなものはどうだっていい。相対的なものは問題にならない。

「ただキリストに圧倒されて、どうにもなりません。ありがたくてしょうがありません。力が来てしょうがありません」

と、そういうしょうがない世界なんです。

止むに止まれずということ。止むに止まれざるところの、そういった在り方が一番本当です。ヒルティーがそう言っています。西郷南洲というのもそういった質の魂の人だったね。そういう意味で、私は南洲というのは好きだ。南洲というのは凄い。

●アナテマ魂

ローマ書に戻ります。

1我キリストに在りて真をいい虚偽を言わず、2我に大なる憂あることと心に絶えざる痛あることとを我が良心も聖霊によりて証す。3もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。

この3節、ローマ書9章の焦点は1～3節です。

「自分なんかどうなったっていい、彼らが救われることが自分の悲願だ。キリストに棄てらるるも亦ねがう所なり」

という。我々の救は、人を救わんがための救です。救われてあとはノホホンなんて、そんなものは救でも何でもない。

「私は何もありません。圧倒されているだけです」

というのが一番強い。

「あなたは信仰を何年やってますか？」

「何年か、そんなことは知りません。非連続の連続で、圧倒されているだけです」

と、それでいいんだ。そうすると、力が来てしょうがない、光が来てしょうがない、生命が来てしょうがない、愛が来てしょうがない。そういうしょうがない人間に段々されてしまう。

人がどう評価しようが、どう思われようが、どうけなされようが、そんなことは全部問題ではない。佐久間象山はそういう人でした。象山の記念館に行って、私はやはり感激した。ああいう記念館に行って、ただ、

「象山というのはこういう人だ」

ではだめなんだ。

「自分も象山に負けないだけの質になるぞ」

と、そういったように見る人が本当に象山を見る人なんだ。象山に限らず、そうです。上野に西郷隆盛の銅像がある。そうしたら、西郷隆盛に負けないだけの、そういった気持ちが起きてこなければ、西郷さんも喜ばない。吉田松陰も凄いね。

「身はたとひ武蔵の野辺に朽(くち)ぬとも留置(とどめおか)まし大和(やまと)魂」

という辞世の句がある。

本当に棄身で生きた人は死なないです。死んでも死なない。永遠の生命というのはそういう質のものだ。あなた方自身も全的に棄身で生きると、それはもうキリストは天国の素晴らしい所に連れていってくださる。もう地上において、天国を頂いていなければだめです。

「天国は汝らのうちにあり」

という。ローマ書9章1節から3節は凄いね。

「呪われて一向差し支えない」

という魂をアナテマ魂という。ローマ書9章はこの3節だけでいい。みんなの救のためには自分はどうなってもいい、キリストに捨てられてもいいと。このパウロの9章3節だけでたくさんだ。